TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　850語

# The Lantern and the Fan

## ちょうちんとせんす

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Citti Sparks

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　里帰りしたいふたりのおよめさんに、お義父さんが出したなぞ。「紙につつんだ火」と「紙につつんだ風」とは何でしょう？



In a Japanese village there once lived a man who had two sons. When the sons were grown up, each brought home a wife from another village a long distance away. The father was greatly pleased with his two daughters-in-law, and for many months they all lived very happily together.

At last the two young wives asked to go home to visit their friends. Among the Japanese the sons and the sons' wives must always obey the father, so the two wives said, "Father-in-law, it is a long, long time since we have seen our friends. May we go to our old home and visit them?" The father-in-law answered, "No." After many months they asked again, and again he answered, "No." Once more they asked. The father-in-law thought, "They care nothing for me, or they would not wish to leave me, but I have a plan, and I can soon know whether they love

their father-in-law or not." Then he said to the older of the two wives, "You may go if you wish, but you must never come back unless you bring me fire wrapped in paper." To the younger he said, "You may go if you wish, but you must never come back unless you bring me wind wrapped in paper." The father-in-law thought, "Now I shall find out. If they care for me, they will search the country through till they find paper that will hold fire and wind."

The two young wives were so glad to visit their old friends that for almost a month they forgot all about the gifts that they were to carry to their father-in-law. At last, when it was time to go home, they were greatly troubled about what they must carry with them, and they asked a wise man where to find the strange things. "Paper that will hold fire and wind!" he cried. "There is no such paper in Japan." The two women asked one wise man after another, and every one declared, "There is no such paper in Japan." What should they do? They feared they would never see their home again. They were so sad that they left their friends and wandered a long distance into the forest. Great tears fell from their eyes.

"I do not let people cry in my woods," said a voice. "My trees do not grow well in salt water."

The poor wives were so sorrowful that they forgot to be afraid, and the older one said, "Can we help crying? Unless I can carry to my father-in-law fire wrapped in paper, I can never go home." "And I," wailed the younger, "unless I can carry wind wrapped in paper, I can never go home. None of the wise men ever heard of such things. What shall we do?"

"It is easy enough to wrap fire in paper," answered the voice. "Here is a piece of paper. Now watch." They watched, and the strangest thing in all the world happened right before their eyes. There was no one to be seen, but a piece of paper appeared on the ground and folded itself into a Japanese lantern. "Now

put a candle inside," said the voice, "and you have paper holding fire. What more could you ask?"

Then the older woman was happy, but the younger was still sad. She saw now that fire could be carried in paper, but surely no one could carry wind. "O dear voice," she cried, "can any one carry wind in paper?"

"That is much easier than to carry fire," replied the voice, "for wind does not burn holes. Watch."

They watched eagerly. Another piece of paper came all by itself and lay on the ground between them. There was a picture on it of a tree covered with white blossoms. Two women stood under the tree, gathering the blossoms.

"The two women are yourselves," said the voice, "and the blossoms are the gifts that the father-in-law will give you when you go home."

"But I cannot go home," the younger wailed, "for I cannot carry wind wrapped in paper."

"Here is the paper, and there is always plenty of wind. Why not take them?"

"Indeed, I do not know how," the younger woman answered sorrowfully.

"This way, of course," said the voice. Some long, light twigs flew to the paper. It folded itself, over, under, together. It opened and closed, and it waved itself before the tearful face of the younger woman. "Does not the wind come to your face?" asked the voice, "and is it not the fan that has brought it? The lantern carries fire wrapped in paper, and the fan carries wind wrapped in paper."

Then, indeed, the two young women were happy, and when they came to the home of their father-in-law, he was as glad as they. He gave them beautiful gifts of gold and silver, and he said, "No one ever had such marvels before as the lantern and the fan, but in my home there are two more precious things than these, and they are my two dear daughters."

日本のある村に、ふたりのむすこがいる男の人がすんでいました。むすこたちは大人になると、それぞれ遠くはなれたべつの村から、およめさんをつれてきました。お父さんは、ふたりのおよめさんがとても気に入って、何か月ものあいだ、みんなでとても幸せにくらしました。

とうとう、ふたりの若いおよめさんは、ふるさとの友だちに会いに帰りたいと言いだしました。日本では、むすこもむすこのおよめさんも、いつもお父さんの言うことを聞かなければならなかったので、ふたりはこう言いました。「お義父さま、友だちに会わなくなって、ずいぶん長い時がたちました。ふるさとの家へ帰って、友だちに会ってきてもいいでしょうか。」お義父さんは「だめだ」と答えました。何か月もたってから、ふたりはまたたのみましたが、お義父さんはまた「だめだ」と答えました。ふたりはもう一度たのみました。お義父さんは考えました。「ふたりはわしのことなど何とも思っていないのだ。でなければ、わしのもとからはなれたいなどと思うはずがない。だが、いい考えがある。ふたりがわしを大事に思っているかどうか、すぐにわかるだろう。」そして、お義父さんは上のおよめさんに言いました。「行きたければ行ってもよい。だが、紙につつんだ火を持ってこないかぎり、二度と帰ってきてはならない。」下のおよめさんにはこう言いました。「行きたければ行ってもよい。だが、紙につつんだ風を持ってこないかぎり、二度と帰ってきてはならない。」お義父さんは考えました。「さあ、これでわかるぞ。わしのことを大事に思っているなら、火と風をつつめる紙が見つかるまで、国じゅうをさがしまわるだろう。」

ふたりの若いおよめさんは、ふるさとの友だちに会えたのがうれしくて、ひと月近くも、お義父さんに持って帰るおみやげのことをすっかりわすれていました。とうとう帰る時が来ると、ふたりは何を持って帰ればいいのか、とてもこまってしまい、かしこい人に、そのふしぎなものがどこにあるのかたずねました。「火と風をつつめる紙だって！」とかしこい人はさけびました。「そんな紙は、日本にはありませんよ。」ふたりはつぎつぎにかしこい人にたずねましたが、だれもが「そんな紙は、日本にはありません」と言いきりました。どうしたらいいのでしょう。ふたりは、もう二度と家に帰れないのではないかと心配になりました。あまりにかなしくて、ふたりは友だちのもとをはなれ、森のおくへ遠くまでさまよっていきました。ふたりの目から、大つぶのなみだがこぼれました。

「わたしの森では、だれもないてはいけないのだ」と声がしました。「わたしの木は、しおからい水ではよく育たないからね。」

かわいそうなおよめさんたちは、かなしすぎてこわがるのもわすれていました。上のおよめさんが言いました。「泣かずにいられましょうか。紙につつんだ火をお義父さまに持っていけなければ、わたしは二度と家に帰れないのです。」「わたしも」と下のおよめさんは泣き声で言いました。「紙につつんだ風を持っていけなければ、二度と家に帰れないのです。かしこい人たちも、だれひとりそんなものは聞いたことがないと言うのです。どうしたらいいのでしょう。」

「火を紙につつむなんて、かんたんなことだよ」と声は答えました。「ほら、ここに紙がある。さあ、見ていなさい。」ふたりが見ていると、目の前で、世界でいちばんふしぎなことがおこりました。だれのすがたも見えないのに、地面に紙が一まいあらわれて、ひとりでにおりたたまれ、日本のちょうちんになったので

す。「さあ、中にろうそくを入れてごらん」と声は言いました。「これで、紙が火をつつんでいることになる。ほかに何がいるかね？」

上のおよめさんは幸せになりましたが、下のおよめさんはまだかなしそうでした。火は紙につつんで運べるとわかりましたが、風を運べる人なんて、ぜったいにいないと思ったのです。「ああ、やさしい声さん」と下のおよめさんはさけびました。「風を紙につつんで運べる人なんて、いるのでしょうか。」

「それは火を運ぶよりずっとかんたんだよ」と声は答えました。「風は紙にあなをあけたりしないからね。見ていなさい。」

ふたりはわくわくしながら見つめました。もう一まいの紙がひとりでにやってきて、ふたりのあいだの地面におかれました。その紙には、白い花がいっぱいさいた木の絵がかいてありました。木の下には女の人がふたり立っていて、花をつんでいました。

「このふたりの女の人は、あなたたちだよ」と声は言いました。「そして花は、あなたたちが家に帰ったときに、お義父さんがくれるおくり物なのだ。」

「でも、わたしは家に帰れません」と下のおよめさんは泣き声で言いました。「紙につつんだ風を運べないのですから。」

「ここに紙があるし、風はいつだってたっぷりある。どうして持っていかないのかね？」

「本当に、どうしたらいいのかわからないのです」と下のおよめさんはかなしそうに答えました。

「もちろん、こうするのさ」と声は言いました。長くてかるい小えだが何本か、紙のところへとんできました。紙はひとりでにおりたたまれました。上に、下に、ぴったりと。それはひらいたりとじたりして、下のおよめさんのなみだにぬれた顔の前で、ひらひらとゆれました。「顔に風が来るだろう？」と声はたずねました。「その風を運んできたのは、せんすではないかね？ちょうちんは紙につつんだ火を運び、せんすは紙につつんだ風を運ぶのだ。」

それで、ふたりの若いおよめさんは本当に幸せになりました。お義父さんの家に着くと、お義父さんもふたりと同じくらいよろこびました。お義父さんはふたりに、金や銀の美しいおくり物をあたえて、言いました。「ちょうちんとせんすのようなすばらしいものを持っていた者は、今までだれもいない。だが、わしの家には、これよりもっと大切なものがふたつある。それは、わしのかわいいふたりのむすめたちだ。」

## たんご と クイズ ちょうちんとせんす

| | | |
|---|---|---|
| **lantern** ちょうちん | **fan** せんす | **paper** 紙 |
| **fire** 火 | **wind** 風 | **candle** ろうそく |
| **blossoms** 花 | | |

**Q1** 上のおよめさんが持って帰るように言われたものは？

① 紙につつんだ火　② 紙につつんだ水　③ 紙につつんだ風

**Q2** 「紙につつんだ火」の正体は？

① せんす　② ちょうちん　③ てがみ

**Q3** お父さんが、ちょうちんとせんすよりも大切だと言ったものは？

① 金と銀　② ちょうちんとせんす　③ ふたりのむすめ（およめさん）

**こたえ**

Q1 ① お義父さんは上のおよめさんに「紙につつんだ火を持ってこないかぎり、帰ってきてはならない」と言いました。

Q2 ② 紙がおりたたまれてちょうちんになり、中にろうそくを入れると、紙が火をつつむのです。

Q3 ③ お父さんは、ちょうちんとせんすよりも、ふたりのかわいいむすめたちが大切だと言いました。

**原田英語の多読ベストジュニア**

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典**　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Citti Sparks（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。